

日本旧石器学会普及講演会 2021年9月25日

小野 昭

旧石器捏造事件を契機とした問題意識と体制の変革－過誤に学ぶ－

要旨

講演の趣旨：事件後20年以上を経過するので、研究の世界における世代の交代も進んでいる。旧石器時代研究のさまざまな分野における成果は逐次進捗していくと思われる。本講演では、そうした個別の論点ではなく、事件を契機として、巨大な負の遺産をどのように克服しようとしてきたのか、より正確に表現すれば、突き落とされた汚辱のドブからどのように這い上がろうとしてきたのかを、研究における新たな問題意識の形成と、研究体制の両面から考える。いわば「過誤に学ぶ」という、単純ではあるが普遍的な人類知の見地から接近を試みる。

講演の主な内容：

1 初めに：

講演のいくつかの前提を述べる。本講演者の世代が今後の研究上の課題や展望を当為として述べることは既に陳腐な響きがある。というのは、研究者の場合、発言するということは、つまるところ自らに実践を課すことを意味するので、実践が可能でなければ沈黙しなければならないからである。講演中で今後の課題に言及することがあれば、それは正確に言えば「希望する」と読み替えて理解願いたい。本演題のような場合、研究上のなにかもっともらしい一般的な傾向や命題から出発するのではなく、自分の経験を通過したことに依拠して話す必要がある。実践における成功や失敗の分析が重要であろう。

2 研究体制をどうしたか：

2-1 どうするかの前に：検証作業、国内外の学会組織への後始末報告など。

2-2 日本各地で活動する地域の旧石器研究組織や研究会と、旧石器研究に関する全国学会（日本旧石器学会）の設立の可否問題。旧石器時代の研究は日本各地で自主的で地域に根差した研究会が活動していたので、旧石器時代に研究対象を絞った全国組織が必要であるかどうかの議論が必要であった。必要だとなった場合でも、地域の研究会単位の組織加盟かそれとも組織という枠のない個人加盟かを検討する必要があった。

2003年12月に組織形態は個人加盟による『日本旧石器学会』の設立が実現した。

2-3 国際組織設立の必要という外圧と内在的な要求。

2002年6月に中国、韓国、ロシアにおいて、東アジアにおける旧石器研究の国際組織を立ち上げる動きが急を告げているという動向が伝えられた。進めるならば日本側の対応組織が必要である。紆余曲折はあったが、これは旧石器研究の全国組織結成の問題と不可分に結びついた。

2-4 アジア旧石器協会 Asian Palaeolithic Association (APA)の創設まで。国際組織を立ち上げるとはどういうことか。旧石器研究の内容の違い、文化の違いに根ざした学問研究の伝統、学会の組織形態などに関する違いをどのように相互に理解できるか、またそう

した状況を共有する努力が継続的に必要であった。

2003年に日本旧石器学会が設立され、学会活動の重要課題の一つに、日本、韓国、中国、ロシア4か国間で旧石器研究の国際組織を立ち上げることが明記された。2008年6月にロシア・アルタイのデニソワ洞窟近くのキャンプ地を会場として「アジア旧石器協会」の名において、5年越しの準備を経てようやく設立された。

2-5 日本の研究の発信の方法。日本の旧石器研究は視野が狭窄で、国際的に孤立しているという批判が捏造事件を契機に盛んになされた。それに応えるべく努力をしたが、特に将来を見通して、大学院生、若手研究者はもちろん、中・高年の研究者も含め、世界各地の大小の国際会議や研究会で報告し、各種の考古学の国際誌に投稿し、組織運営にも関与することを促した。英語で論文を投稿するものを集団として、層として育てることをねらった。日本旧石器学会でそのように決議や勧告をしたことは無いが、そういう意識で取り組んだ。アジア旧石器協会を積極的に活用することを期待し、日本で2回開催した際それを部分的に実現したが、日本以外で開催された場合、やはり大学院生にその機会を与えるのは財政的にもなかなか難しい点があり、現在も改善されてはいない。

3 研究の問題意識・テーマがどのように転換したか：

- 3-1 世界の旧石器研究における大きなテーマとの接続。具体的には新人 *Homo sapiens* のユーラシア諸地域への拡散問題との邂逅。
- 3-2 酸素同位体ステージ3 (OIS3/MIS3) プロジェクトの推進。日本第四紀学会、日本学術会議、国際第四紀学連合 (INQUA) との連携。
- 3-3 「日本の旧石器研究の視野狭窄、国際的孤立」という批判への応答。
(これは2-5がその内実を形成している)

4 最後に

4-1 日本旧石器学会の大会テーマを見る。

2003年～2021年度まで(コロナ・パンデミックにより中止となった2020年大会を除き)18回の大会があり、テーマを通覧すると問題関心の軌跡が読める。テーマの頻度は以下のとおりである。

「後期/上部旧石器時代のはじまり」(APAの日本開催における共催2回を含む)が5回
「地域に焦点を当てたテーマ(南九州・東北日本・北海道)」3回
「環状集落/生活」・「年代/編年」・「石材獲得・消費/石刃技法」2回
「狩猟」・「使用痕」・「データベース」・「理論と方法」1回

4-2 地域・日本列島・世界という3つの階層構造の認識に基づく実践。

研究者がみな、3つの階層にわたって常に論文や報告を書くことはのぞみ得ない。しかし、地球上の一点である地域の課題を追究するばあいでも3つの階層を常に意識して仕事を進めることが重要である。というのは、世界的な発見や注目される遺跡も、具体的には地球上のどこかの具体的な一地点であり、同じように日本から世界に問題提起ができる。遺跡という点では世界中どこでも等価である。